



昼休みの会話

学校建設課 山本克世

宮沢 好

塚田洋一

A 「学校建設にかかわって七年大量建設の波の中で文字通り昨日の仕事を振り返る暇もなく、一人年間四億以上という当面の業務処理に追われる毎日だったようだけど。」

B 「校舎の修繕工事に全体のエネルギーの三分の二をさかざるを得ない中で、新、増改築の設計が行われているからね。」

C 「でも全体計画を作成するときには、一種の緊張感にかられるよ。子供たちの人間形成に影響をあたえる総合的な計画の一部に参加しているという実感があ

るからなあ。」

A 「設計作業の中で重要な位置を占めてきた標準設計図も、今年には実施設計図面としての利用率が半分以下になり、設計期間が従来の二〜三カ月から平均六カ月になっているということでは、学校施設設計の過渡期に来ているといえるね。」

B 「そういった意味では、『調査季報』の学校特集は、学校施設を多角的な視点で考える必要性を提示しているね。」

C 「一読すると何か希望がわいてくるよ。」

A 「でも現状とこれからを考えると不安も感じるね」

B 「今まで『なぜ』思うようになされなかったのか。真の理由を分析しないと今後同様な動きしか出さないんじゃないかな。具体的に。」

C 「たとえば標準設計図を単に決定図として扱うのではなく、標準化の系の中からとらえ、コストプランニング、面積配分、ビルディングエレメント、構造体の検討など、一つ一つ洗い直さなければ。」

A 「と同時に建築的な個々の検

討を結びつける環として内部設計をやらなければいけないね。」

B 「既設の建物の使われ方の再考をふくめた計画的な修繕、改造築も、今後の大きな課題だ。」

D 「もちろんそのためには機構組織の確立も必要だ。」

A 「市教育プランなどの成果を将来共、いかに建築的に組入れて行くか、また学校開放等による地域社会とのかわりあいを実践していくか。学校施設設計に際しても住民を含めたあらゆる分野の人達と関係を保っていかなければね。」

B・C 「まあ、ともかく体に気をつけてお互いに頑張ろうよ。」

ヤング学の提唱

市民局広報課 市川孝史

役所の仕事を一口でいうと何だろう。——私自身はサービス業だと思っているのだが、もちろん違った認識の人も多いことだろうと思う。ただ、そう考えないと、市役所が市民の生活に口を出すということの積極的な意味づけが無いだろう。一般の人の目からみて、役所なんて、

そうそう日常の生活にひっかかりがあるものではない。

ところで、役所が、地域サービス業として仕事を開拓していく上で、一般に、そのターゲットは比較的高年齢層にあてられているという気がする。自治会、町内会の役員、各種団体の代表者、それから一般市民にしても、役所に積極的コミットしてくるのは、概して成熟しきった人たちである。だが、現実の都市社会の活動を支え、新しい文化を生み出すのは若い人たちではないか。しかし、市役所の仕事の中から、『若い人』という概念はほとんど欠落しているように思える。

西武百貨店の躍進やバルコなどの成功の背景にあったのは、ヤング層にターゲットを絞った店づくり、商法だったという。

それにラジオの深夜放送、ラジオ、テレビの欽ドンを支えている投書、投稿の主は、圧倒的に中学、高校生だという。しかも、その年齢は、ますます低下する一方とか。都市中心部、その他で行われる催し物も参加者の大半は若い人である。その中

核にヤング中年がいるとしても……。今、都市の文化を支えているのは、これらヤング層だといっても過言ではない。

文化は、生きた都市の活動の中で、きわめて重要なものだと考えるが、目を手近な所に転じて、横浜市についてみても、たとえば区民会議が、本当に一人歩きできるようにするためには、若い人たちをどう取り込んでいくかをぜひとも考えていかなければならない。市役所も小売業界の動きをよそごとと考えず、ヤング学に真剣に取り組むことが必要な時機にきているのではなからうか。

へあとがき」横浜市の職員は誰もみな人口急増から始まって同じように横浜市政を語る——とある自治体の人が感心していたことがあった。その人口急増もようやく鈍り、低成長下、横浜の都市問題の基調も変わりつつあるようだ。今回はその一部にふれようとした。これからも何が変り、何が課題かいろんな角度からみていかなければならない問題だろう。(北小路)